
青山

樋川真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青山

【Nコード】

N4191C

【作者名】

樋川真

【あらすじ】

頭のリミッターを外しましょ。貧乏だから競艇で稼ごうとして乏しいお金がさらに乏しくなるんじゃない。

第1話

「一生夢の中でもよろしいやないですか。」

まおはそう言って焼酎をちびつと飲み、傍らのありさを見た。

ありさは豆鉄砲をくらった鳩みたいにまおを見た。

和泉丘町は夏模様で蝉がしゃわしゃわ鳴いていた。

「昔付き合ってた人を殴ってたことがあってな。」

まおはありさにそう言って小さく息を吐いた。

「いわゆるDVというやつやけど、その頃は今より病気もひどかったらしくて、自分で自分のしていることがどうすることも出来なかった。」

「わたしにもDVをする？」

「しないとと思う。そんなやないんや。DVの因子があつたつて2度も同じ事をするとは限らん。」

「じゃあいいよ。」

まおは和泉丘町で今の暮らしになるまでに病院に入っていたことがある。

統合失調症と呼ばれる病であると診断された。

リハビリは以後一生、時間薬を効かせながら日々を過ごし、老いてゆく。という人生の過ぎ方もある。

まおは30才台で隠者のような暮らしになり、以後ひっそりと暮らししている。

ありさもまおとどうやら同じ病で、ありさとまおは生活共同体のような暮らしをしている。

幸いにしてまおとありさはまだ両親が存命で、ありさとまおはともにも二重生活というか近距離遊牧生活を送っている。

病気でかつ無職で生きてゆくには生活保護という手段がある。

病気が寛解しないと職に就くこともままならないから、生活保護を受けて生きてゆくことが統合失調症にかかった人には多い。

十数年入院して無くとも症状が悪化して入院を余儀なくされることもままある。

一定数病気ながら仕事に就き生活をしていつている人もいるにはいるが、無職で福祉機関の世話になっている人も少なからずいる。

精神科のデイケア施設はそういう人々の吹きだまりだが、リハビリ施設のデイケアの中でも参加者の多いデイケアでは派閥も出来る。だから意外とうわさ話やあいつはどうもかなわんといった類の話も多い。

個人的にまおとありさは無派閥の中立派なのでさほどつまはじきにもされないが、うわさ話はよく耳に入ってくる。

社会的には喫煙はなるべくしないでおこつという風潮の中、まおとありさが参加しているデイケアには喫煙室がそれも結構広いスペースのものがある。

個人的な実感なのだがある種精神安定剤だろうと前置きしてまおはたまにたばこを喫む。

まおとありさの参加するデイケアの参加者には喫煙者がかなり居る。

完全に喫煙室を撤去しないところを見ると、このデイケアを持っている病院は適度の喫煙はある種の安定剤になっていると見ている向きがある。

しかし健康増進法という法律があるので以前に比べ禁煙区画も増えてきた。屋内でたばこを喫もうとすると病棟カリハビリセンターかデイケアの喫煙室に行かないと喫めないようになってきている。

「ネットをさわりたいのですが。」

まおがそう言ってスタッフにPHSを借りつけてPCに接続し、mixiのログイン画面にIDとパスワードを打ち込み、情報を得

ている様を見ながらありさが言う。

「まあ、済んだら替わってくれるか？」

「またオークションか？」

「うん。」

「たいがいにしときや。」

「うん。もうこの入札だけ。」

「そう言っただまだやめる素振りもないよな。」

「う…。」

「お金なくなるで。」

「はい。」

まおは思うのだ。一生夢の中でもよろしいやないですかと。

宝くじを買いあさってお金が無くなり、生活費を使い込み、あつぷあつぷになりながらそれでも何とか生きている。そういう生活でも夜は暮れ朝日は昇る。

「おかえりなさいませ。」

まおはふらふらと日本橋をうろついてメイドカフェムーランルージュに入って行った。

鼻屑にしているメイドのかおりさんにコーヒーを注文すると小さく一息ついて店の中を見渡した。

これがいわゆるメイドカフェという作りのムーランルージュは店名はまるでセクシィキャバクラだが、メイドたちは風俗嬢のようなサービスをするわけではない。

客に内緒にしているがメイドのかおりさんは競艇が趣味で住之江の常連である。

かおりさんはまおにコーヒーを持っていった時にいきなりまおに聞かれた。

「かおりさん、競艇ってやったことありますか？」

もういつもですよと内心叫びながらかおりさんはにっこりわらっ

て言った。

「Wiiに競艇がありましたでしょうか？」

「いえないですけど。」

「競艇って興味がおありで？」

「話の種に一度ぐらいはやってみようかと。」

「じゃあ、新開地のボートピアなどに行かれたらいかがでしょうか？」

「大阪近辺にないでしょうか？」

「住之江に競艇場がありますけど。もしくは尼崎とか。」

「客とメイドとかでなく知り合いということ一度一緒に行っただけじゃないでしょうか？」

「わたしですか？」

「いけませんか？」

「服務規程が頭をよぎったかおりは少し考えて言った。」

「いいですよ。じゃデートしましょうデート。」

第2話（前書き）

かおりとまおは住之江競艇場に来ていた。ボートのエンジン音にか
おりのテンションは上がる一方だった。

第2話

8月15日住之江公園駅

香織は競艇新聞を買いたくてうずうずしながらまおを待っていた。

「すいません！遅くなりました！」

「ああ朝山さん。おはようございます。」

「誘っておいて遅刻はまずいですよね。おわびに何かおこります。」

「いいえ。いいですよ。それよりレースが始まりますよ。いきましょ。」

住之江競艇場は摂河泉競争の初日でそこそこ人が来ていた。

入場ゲートをいきなりくぐろうとしたまおのシャツのそでをくいと引っ張って香織は入場券売機を指差した。

「100円です。」

「え？競艇場って入場料取るんですか？」

「昔は50円でしたけど値上がりしたんですよ。」

「かおりさん随分詳しいんですね。」

「え？いえそれほどでもないですよ。さ、入場券買って中に入りましょ。」

香織が券売機で入場券を買っていたら後ろから声がした。

「香織さんじゃないですか。やっぱり摂河泉は外せませんよね住之江では。」

沙織だった。

「あなたも来たんだ。競艇やるんだ。」

「一度ぐらいはやってみようかと。」

「そう。わたしはデートだから失礼するわね。」

「競艇場でデートですか？」

「いけない？」

「いけないはないですけどね。」

「それじゃあね。」

まおに入場券を渡して香織はゲートをくぐった。

スタンドの向こうにレースプールが見えた。

「へえープールで競争するんですか。」

「住之江はそうだけど、鳴門競艇は海を仕切ってるわよ。」

「行った事あるんですか？鳴門。」

「何回かね。」

「実はけっこうしてるんじゃないんですか？競艇。」

「いえ、そんなことは。」

（趣味だよ趣味。）

「第2レースの発売してるわ。オッズは3 - 4が15倍、2 - 1が10倍ね。2 - 1は来ないわね3 - 4にしましょ。」

第2レースが始まった。

猛然としたスタートダッシュをする6艇のボートがコーナーを周っていくのを香織は食い入るように見て叫んだ。

「いけー！！！！そこでインを取れ！」

まおはそんな香織を見て少々引いていた。

着順は3 - 4。

配当は15倍。香織の買った舟券は1万円だから15万円になっていた。

第3話

結局住之江での戦績は香織が11レース中7レース的中75万1200円配当。まおが7レース中3レース的中21万3000円配当と二人とも黒字だった。

住之江の後なんばに飲みに行こうということになり、すこし気取らない感じの居酒屋に二人は入った。

「かんぱーい！」

「いやービギナーズラックやねえ、まおさん。」

「かおりさんすごい。どんくらいもうけたんです？正直なところ。」

「だいたい70万ぐらいかな。まおさんは？」

「20万ぐらいです。」

「お店に内緒なんでしょ？」

「へ？」

「競艇が趣味って。」

「いやー趣味というより…まあ、まおさんにならないか。そつよ。趣味趣味。」

香織は生ビールの大ジョッキをゴクゴク飲み干して大きな声で店員を呼んだ。

「おにーさん！もういっぱい！」

まおは梅酒をちびちびやりながらヒートしてゆく香織を見ていた。

「香織さん。」

「かおりでいいわよ。のんでるー？まお。」

「ハオチー。」

「何語よそれーうははははは。」

「いつもこんな調子なんですか？」

「んー？まおち飲みが足りんなー。もつとのみなさいよんー。」

「かおりさん。」

「かおりでいいわよー。」

「競艇つてすごくお金入ってくるんですね。」

「まあ勝つときはかりやあれへんよ。」

「そうなんや。」

「勝つたらばあつとつこてまう。そや。」

「いいんですか？」

「ええねんええねん。」

「なくなつたらまた稼いだらええんや。」

第4話（前書き）

香織がメイドになったわけ。果たして。お店にはどういついきさつで勤めるの事になったのやら。

第4話

困ったことに香織にはモラルとか慣習で行動を規制するという頭はない。

欲しければ男でも浴衣でも手に入れずにはおかない。

「あの一、香織さん？」

イトーヨーカドーで浴衣を物色していた香織をよびとめる声だったので香織は振り向いた。

「何か？」

香織に声をかけた沙織は、あまりフレンドリーではない香織の応答に若干ひるんだが意を決して言った。

「やっぱり香織さんですか。沙織です。真北沙織。高校の同級生の。今は大阪でメイド喫茶のメイドをやってます。」

「…。」

（あなたは背も小さいし、いわゆる萌え系だからさぞ職場ではモテるだろうに。）

香織は相変わらず浴衣を物色していた。

「そのメイドの沙織さんがわたしに何か？」

「いえ、香織さんをスカウトしようかと。」

「スカウト？」

「香織さんはツンデレ系の美人だし、お店でお客様すぐつきますよ。ツンデレも結構モテますよ。」

「…。」

「どうでしょうか？」

「エロいサービスとかしるとか言うんじゃないでしょうか？個室でなんかしるとか。」

「風俗じゃありませんよ。」

「具体的にメイドってどんなことするのよ。」

沙織は一瞬台本をちらりと見る様に視線を落とし、言った。

「メイド喫茶では男のお客様を（だんなさま）とか（ご主人さま）、女のお客様を（おくさま）とか（お嬢さま）とお呼びいたします。お店はお屋敷ということで、ご主人さまやお嬢さまはお屋敷にお歸りになられたということ、おかえりなさいませと申し上げてくつろいでいただくのです。」

「やっぱエロいサービスとかするんやん。」

「いやそれは。」

「英国ではご主人さまがメイドに手をつけるって話当たり前にゴロゴロ転がってるやん。」

「香織さん、エロ同人誌の読みすぎ。メイドは純粋にサービス業なんです。」

「ふーん。」

「私をツンデレって言ったわよね？」

「え、ええ。」

「私ってそんなに無愛想？」

「愛想よくは見えませんかよ。」

「ツンデレってことはツンツンして時々甘えたりしないといけないわけよね。」

「いけないわけではないですけど、その方が男心をくすぐる様ですね。」

浴衣をハンガーに戻して香織は言った。

「まあやってみるわ。ダメやったらやめてもええよね？」

「それはモチロン。」

大阪日本橋周辺にはメイドカフェが散在している。

秋葉原ほど無数というわけではないがそれなりにいわゆるメイドカフェという店もある。

バーバーやリフレクソロジーもあり最近では出前もメイド服でしてくれる店もある。

しかし客の人気はカフェが根強い。

沙織の勤めているカフェはメイドたちに萌え系や癒し系が多くい
わゆるツンデレ系やお姉系はいなかった。

「はじめまして。沢田香織です。特技は麻雀、趣味は競艇。」

「ムーランルージュへようこそ。私は執事の沢木あかね。」

黒のサテンチェックのベストに白シャツ、赤の蝶ネクタイに黒の
ツータックパンツ、黒の革靴といういでたちのあかねはそう言って
香織に会釈した。

「随分メイドカフェっぽくない名前ですね。」

「まあ勢いでね。候補にはサムゲタンというのもあったんだけど
それはちよつとということとで今の名前にね。」

「香織さん、メイドネームとか決められるけどどうしますか？」

「メイドネーム？」

「クラブなんかの源氏名みたいなものです。」

「そうですね…香織と漢字なら少しいかめしいからひらがなで
かおりにしようかしら。」

「それでいいですか？」

「ええ。それで。」

第5話（前書き）

飲む打つ買うは男の道楽とは昭和の男。今はむしろ女の道楽だった
りする。

第5話

和泉丘町は夜に蝉が鳴いている。 ありさはまおの部屋で小説を書いていた。

帰ってこれないから適当にしておいてくれとまおからメールが入ってきたのでまおの部屋で小説を書いていた。

ありさはまおが香織と飲んでいるとは知らなかった。

「まおち。」

香織はふらふらと湊町のラブホ街を歩きながらまおの腕を引っ張ってラブホに入ろうとしていた。

「競艇にさそったのはほくですけど、いいんですか？」

「んー？なにがあ？」

「ここラブホでしょ？」

「わたしとはしたくないわけ？」

「いえそういうわけでは。」

「ならええやん。」

「飲んで打ったから当然次は買いでしょ。」

「昭和の遊びじゃあるまいし。」

「細かいこと気にしない。」

ダブルベッドにまおを押し倒して香織はまおのズボンを脱がした。

そしてパンツを引き下げてまおの一物をしゃぶりだした。

「ほらほら。元気になってきたやん。」

「ああ、かおりさん。」

「69しよ。」

まおは音をたてて香織の局部を吸った。

ひとしきり絡み付いた二人は、まおが香織の上で果てるまで激情のおもむくままになっていた。

ありさは一晩中ネットに小説を書いていた。
蝉がしゃわやしゃわ鳴いていた。

ありさが昼過ぎに目覚めると、まおがざるうどんを作っていた。

「かえつとったんか。」

「ああ。もうできるで。」

茹で上がったうどんをざるにあげて水ですすぎ、皿に盛つてめんつゆをグラスに注いでネギと生姜を添えてテーブルに出してまおは言った。

「たべよか。」

ありさは布団から起き上がってテーブルにつき箸を取った。

「やっぱり生姜あったほうがええなあ。」

ありさはそう言っとうどんをすすった。

第6話（前書き）

まおとありさは旅に出た。

第6話

「昨日なにしとったん？」

「小説書いとった。競艇はどうやった？」

「いわゆるビギナーズラックつうやつやったみたいや。まだ10万ほど残つとるから旅行でもいこか。」

「勝ったん？すごいやん。」

ざるうどんをすすった後にありさは目を輝かせた。

「旅行いうても松山ぐらいやな。道後温泉とか。」

「温泉か。ええなあ。」

「まあ、名古屋でコーチン食うつう手もあるな。」

「宮崎で地鶏は？」

「無理かなあ。」

まおはネットを立ち上げて宿泊情報をあさりはじめた。

魂を偽ることは誰でもできない。 宿泊情報を調べていても、

香織の肌の感触をまおは思い出していた。

「まお？」

「まお。」

「あ、ああ。何？」

「浮気でもしたんか？」

「何で？」

「いや。なんとなく。」

まおはネットをさわりながら言った。

「コーチンのほうがええか？」

香織は自分の部屋でデカ王のラーメンをすすった後にクーラーをつけた。

「まおつて変。」

そう呟きながらまおの身体の感触を思い出していた。

紺のタンクトップに黒パンツ姿の香織は、さてDVDのリモコンはどこだったか探すことになった。

座卓の下かTVの側かすら思い出せず、闇雲に探していた。

探し疲れて、ともかく食べさしのラーメンを食べてしまうことにして、リモコンはその後にしようとして、膝を組み直したら、リモコンらしき感触が膝にしたので膝の下に手を入れると、リモコンが出てきた。

「昨日の残りは40万ぐらいか。」

「まあ残ったほうやな。」

ネットで名古屋市内のホテルの予約を取ってまおとありさは近鉄難波駅に来た。

アーバンライナーのデラックスシートに乗れる名阪マル得切符の4枚綴りを買って、座席指定を受けて改札をぬけ、ホームに降りていった。

「関西出るのひさしぶりやな。」

ありさはうれしそうに若武者を飲んでいった。

「みそかつもくおか。」

「ふとんでえ。」

「名古屋のみそかつは旨い。」

「まあ電車で遠出もええもんやな。わくわくするわ。」

「そうか。」

電車が難波駅を発車した。

第7話（前書き）

どついうわけか、青山とはお墓という意味だったりする。
人生至るところ青山あり。

第7話

「伊勢中川過ぎたから、次は津か。」

「名古屋着くまであとどんくらい？」

「あと50分くらいやな。」

デラックスシートをリクライニングさせて、ありさは移動販売のワゴンを呼び止めた。

「すみません、お茶ください。冷たいの。」

ペットボトルが出てきた。

礼を述べそれを受け取り、ありさはうれしそうにキャップをねじ切った。

香織はまおたちの乗っている車両の隣車両に乗ってビールを飲んでいた。

「名古屋か。ひさしぶりやな。」

名古屋に着いた近鉄特急からまおとありさは降り立った。

「宿は金山やからJRに乗り換えや。はぐれんといいでや。」

「わかった。」

香織はユニモールのみそかつ屋に入りみそかつとビールを注文した。

「しもた。東海は津か常滑か蒲郡か浜名湖やったわ。名古屋にポートピアあったっけなあ。」

出されたクラシッククラガーをコップに注いで、香織は一息に飲み干してつぶやいた。

「名鉄の空港線が近いんかなあ常滑競艇場。」

ありさとまおは金山に行くには名鉄でもいいと気付かずJRに

乗って金山に着いた。

「常滑と蒲郡やったら常滑の方が近いな。」

「何が？」

「競艇場。」

「明日ちよつと行ってみよか。」

「ええよ。」

宿に荷物を置いて、まおとありさは名古屋駅に戻った。

ユニモールのみそかつ屋に入ったらまおの顔がこわばった。

「あら、朝山さん。」

「か、かおりさん。」

そのやりとりを見ていたありさがふーんという顔でみそかつと
ビールの香織を見た。

第8話（前書き）

火遊びは火傷することもあり、よいことはまねしちゃだめ。
でも一度はやってしまつもの。

第8話

「みそかつですか？」

ありさは香織かおりのみそかつをじっと見つめてそう言つと次は、ま
おを見て、クラシッククラガーをまおのシャツに勢いよく注ぎ込んだ。
薄笑いを浮かべていた香織の顔がみるみるひきつった。

ありさが言った。

「浮気者。」

みそかつ屋をすたすた出ていくありさの後をまおは追って行っ
た。

「ありさ！」

「なによ！香織さんと浮気したくせに。」

「それは。」

「香織さんとつきあえば？」

「むこうはあそびや。」

「もてあそんだん？最低。」

「あそばれたんはおれのほうや。」

「言い訳すんか？」

香織が二人に言った。

「その場のいきおいでラブホ行っただけだよ。」

ありさが言った。

「つまみ食いなんてやめてもらえます？香織さん。」

「いきおいってあるやん。」

「でもムカつく。」

まおはありさの顎をひきあげて唇を吸った。

香織は口笛を吹いてにやついた。

「ちよっと、ビール臭い。」

「キスしてごまかす気か。」

「そんなんちゃうよ。」

「まあごちそうさま。あんたら相当バカップル。」

香織はそう言っただけをみそかつ屋に促した。

「丁度いいからご飯、一緒にたべよ。」

ありさは黙ってみそかつ屋に入って行った。

みそかつとビールで香織は再び食べ始めた。

「明日。」

「常滑競艇場行くけど、一緒にどう？」

「そうですねえ……。」

「いいですよ。行きましょ。」

まおが考えているとありさは即答した。

そしてそう返事した後にはありさはみそかつを口にしました。

「セントレアに向かう途中になるわけよ。」

「セントレア？」

「中部国際空港。」

香織はビールを飲みながら話を続けた。

「名鉄常滑線からセントレアにむかって空港線が出るから競艇場はその手前になるわね。」

「常滑でレース開催してなくても場外発売はしてるはず。」

「浜名湖でその日レースしてたら常滑で浜名湖のレースの舟券買えるわけですか？」

「多分ね。」

「じゃあ明日、8:30に名鉄金山駅の豊橋行きホームね。遅刻しないなよ。」

第9話（前書き）

セントレアは国際空港です。国内線はあまりありません。

第9話

名鉄常滑駅から常滑競艇場まで歩いていたらまおとありさと香織は常滑焼の看板をちらちら見ていた。

「蒲郡の場外発売してるかしらね。」

「やってないんですか？」

「競艇場で場外発売を買うのもいいもんやよ。」

「そんなもんなんや。」

「勝つたらセントレアにお風呂入りにいこか。」

蒲郡第10R 2 6 3

126310円

ありさ的中。

蒲郡第11R 5 1 2

4310円

香織、まお、ありさ的中。

「どれくらい勝った？」

「25万ぐらい。」

「じゃあセントレアでお風呂だ。」

名鉄でセントレアに着いた3人はまっすぐ風呂を目指した。

風呂の前に着いた3人は貼り紙を見て固まった。

貼り紙には改装中のため休業と書いてあった。

「改装中かあ。」

「名古屋に戻ります？」

「飛行機に乗って東京に行くよ。」

香織がそう言って国内線のチケットカウンターにむかった。

「面白い人やなあ、イコかまお。」
ありさがそう言って香織のあとに続いた。
「うそやろ。ほんまに東京いくんか？」
香織とありさはすたすた国内線のチケットカウンターにむかっ
た。

まおも後に続いた。

「羽田まで大人3人。」

香織がそう言うと、カウンターのスタッフが申し訳なさそうに
言った。

「セントレアからは成田にしか国内線で東京近郊へは便がござ
いません。」

「ああそう。なら千歳には今からなら便あるかしら。」

「19:00に一便ございます。」

「なら千歳まで大人3人。」

「かしこまりました。」

第10話（前書き）

桑園には馬しかいません。札幌競馬場ですから。ススキノでは本場ジンギスカンといきましょう。しかしこの3人食うか酒飲むかギャンブルするかです。

第10話

「香織さん。」

「何？」

「この航空券に新千歳って書いてますけど。」

「成田か千歳やってん。」

「東京に行くって言ってませんでした？」

「まあええやん。」

新千歳へ向かう飛行機が離陸すると、香織とありさは酒盛りをはじめた。

「ありさって結構いける口やねんな。まあのみ。」

「香織っておもしろいなあ。」

「そうか？うはははは。」

「でもテロリストめ。ワンカップに爆弾仕込む酒呑みがどこにおんねん。」

「香織さんはエロテロリストでしょうが。」

「あたしゃインリンか。」

「新千歳に9時とかですけど宿どうするんです？」

「新千歳に泊まるところあるでしょ。」

「なかつたらどうするんです？」

「こまかいことぐちゃぐちゃ言っな。酒がまずなるやんか。」

「はい。」

新千歳で宿を取った3人は宿に行く前に孝四郎ラーメンに入って味噌ラーメンを注文した。

「北海道でラーメン食わんとどこでラーメン食っねんなあ。」

「なあ。」

「なあ。」

「香織さん、それで路銀とか滞在費とかどうするんです？」

「あんたたちどれぐらいもってんの？」

「50万ぐらいです。」

「あたしが60万ぐらいやから、まああと1カ月はなんとかなるわね。」

「大阪にはいつ帰るんですか？」

「旅に飽きたら。」

札幌競馬場にはJR函館本線桑園駅から送迎バスか徒歩で行くのが便利である。

3人は新千歳空港駅からJRに乗り札幌を目指した。

札幌駅で乗り換えて桑園駅に着くと、日曜日だったので送迎バスが駅前に停まっていた。

送迎バスに乗り札幌競馬場に着くと入場料100円を払って中に入った。

「香織さん、競馬もするんですか？」

「北海道には競艇場もボートピアも無いのよ。」

「だからって馬ですか？」

「稼がないと旅ができないじゃん。」

「まあある程度様子を見て賭けましょう。」

札幌第3R 3 - 1 1 5 2 1 0円

まお的中、香織外れ、ありさ的中

札幌第4R 7 - 1 2 1 3 9 8 0円

香織的中、まお的中、ありさ外れ

札幌第5R 7 - 2 2 4 0 0円

全員外れ

札幌第6R 6 - 8 2 5 0 2 0円

ありさ的中、まお、香織外れ

換金して桑園を後にして3人はススキノへと繰り出した。

「札幌ならジンギスカンは外せないわね。」

「羊ー！」

ジンギスカンを食べさせてくれる専門店ですスキノにあるヤマダモンゴル狸小路店に着いた3人はビールとジンギスカンを注文するとテーブルに座った。

「かんぱーい！」

香織がそう言っつてジョッキの生ビールをぐいぐい飲んで大きく息をついた。

「明日はどこに行きます？」

「次はいよいよ東京よ。」

「羽田行きの航空券3枚買っわよ。」

「あたし今晚いきたいところあんな。」

ありさがビールを飲んでからそう言っつとまあと香織はありさを見た。

「どこいきたいん？」

「ススキノつてラーメンのうまい店あるやんな。」

「あるやろな。」

「昨日のラーメンよりうまいところないやろか？」

「どうかなあ。」

「あるやろ。」

「ここのシメはラーメンやで。」

「それにしよか。」

「さあ食っつて食っつて。」

ジンギスカンを平らげたら3人はシメにラーメンを食べ満悦となつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4191c/>

青山

2010年10月29日13時21分発行